

富士山の世界遺産登録に林業女子会の出現―今年、林業白書は森林への関心の高まりに焦点を当てている。林業が低迷する中、森林を守り育てるには国民の幅広く息の長い支えが求められている。

林業白書

日本の林業は長らく低迷している。林業の産出額はピークだった一九八〇年に一兆円を超えていた。それが近年では四千億円を割り込み、林業で働く人も十五万人から五万人にまで減っている。

その一方で、森林

に対する国民の関心、期待はゆっくり

だが高まりをみせている。

先週発表された林業白書はそれを示す話題として昨年、世界文化遺産に登録された富士山を取り上げた。樹海などの森林は富士山の自然、景観を織り成し、葛飾北斎の浮世絵や小説の舞台は、登山者だけでなく新幹線から霊峰を眺める人の心を捉えて離さない。

学生やさまざまな職業の女性に

よる「林業女子会」の誕生もある。小さな動きではあるが、林業体験や森づくりなどに取り組む「女子会」は九都府県に広がっている。過酷な林業と都会育ちの青年の成長を描いた映画「WOOD JOB!」の公開も、関心の高まりを感じさせる。

百年一作に百年の計を

「百年一作」ともいえる森林の整備には手間と時間がかかる。苗木を植え付け、雑草や灌木を刈り払い、形の悪い木を伐採する間伐をへて、成木を切り出せるのは五十年から百年までの間となる。

このサイクルの維持には国産材の需要確保が重要だが、六四年に木材輸入が自由化されてから利用は減り続け、伐採された木の半分

は使われていない。新たな需要をつくり出すため、十階のビルが建てられる「直交集成板」の開発や、木質バイオマスをつかった発電所の建設など地道な努力が続けられている。だが価格競争力、木以外の資材の開発などを考えるのは難しい。むしろ、国民の関心の高まりを息の長い支えに結びつけることが課題ではないか。

内閣府の調査では、森林に地球

温暖化を防ぐ二酸化炭素の吸収や心身の癒やしの場を期待す

る声が多い。東京湾では「海の森」構想が実現しつつある。国産材を使った東京五輪の競技場建設も一案だ。

白書は地域活動やボランティアだけでなく、予算や税制、寄付などの費用負担も国民や企業に期待している。国土の三分の二に広がる豊かな森林を守り育てる百年の計を、みんなで工夫したい。